



朝念暮念

中津峰山如意輪寺

徳島市多家良町中津峰
TEL088-645-0008 FAX645-0508
http://www.rmt.ne.jp/~nyoirin
nyoirin@rmt.ne.jp

阿波三峰

バス便、 6/18 7/16 9:30アミコ前発

親子の鐘の中津峰

問い合わせい合わせ：徳島市バス観光課 088-652-2133

永井光包氏奮闘記

ご開帳中。受戒が了ると永井光包氏は立ち上がった。本堂の太い丸柱をいつたん抱えるようにして自分の位置を確かめた。そして、常香盤、前机をすりすり、わりと進んでいった。「一段ありますよ」「ハイハイ」「ここが本尊さんの前じゃ」「どうしてわかる」「匂いが違う」そして本尊様をなつかしうに見上げている。

永井氏は一見健常者とかわらない。が、わずかに光の強弱が分かるのみ。氏は底引き網の漁師である。船はカーボンファイバー製、軽くて丈夫な素材のため船速が早い。造船所も初めて、業界でも初めてというなか、素材メーカー、造船所を相手に技術・価格を話し合い苦心して画期的な最新鋭船を作った。加えて長年の経験から網の仕掛けをはじめとする漁具は改良に改良を加えた。そんなわけで長年小松島漁協屈指の成績を収めていた。

信仰深い彼は、私が住職する前から毎月当山の参拝を欠かさなかった。四十年以上続いているだろう。参拝時は同世代の気安さということもあつてしばらく話しこむを常とした。十五年ほど前までは同行は三人だったが、十年ほど前二人となり、今では彼一人を残すのみとなつてしまった。とは言つても彼は六十歳を

過ぎたところである。そんな彼が三年前紀伊水道に出漁中ブリッジで倒れ、意識不明になつた。同乗の弟さんは即座に操業中の網を切り捨ててすぐ帰港。途中で無線連絡で手配しておいた小松島日赤病院に運んだ。機敏な処置の結果、一命をとりとめた。だが、しばらくは意識不明だった。

一月ぐらいいして薄皮を剥ぐように少しずつ意識がよみがえつてきた。意識の回復とともに目が見えない、左半身は動かないという結果が自他ともに明白になつた。身体の一応の安定を得て、リハビリ中心の病院に転院をした。そこでは作業療法士の先生と、「痛い」「生きた証扱じゃ」「から始まつて」「もう殺せ」「殺さん」と喧嘩寸前どころまでいったという。「ほんでもいやな顔せず、根気よくつきあつてくれた。この手が前まで動かぬのに引つ張たら痛い。痛いけど伸ばさな良うならん。リハビリの先生が最初やつてくれたのと、同じ力でやつとんのに良うになつたら痛うない。不思議なもんでよ」

それからが氏の真骨頂だった。定時にやつたり八ピリを時間外に昼夜問わず同じように復習した。そこは奥様と氏の病気を機にOLをやめたお嬢さんが看護があつた。表面は厳しく、心は優しく、中身の濃い介護だった。動かぬ手を引つ張る、「痛い」娘は遠慮しない。氏は娘に「痛がる父親をいじめるのが楽しいか」と毒

づく娘は「ウン」とうなずくが、心で泣いていた。廊下を歩くのに手を貸す。次はすぐ手を離す。リハビリの先生より数段厳しい。夫婦、親子での一心同体のリハビリは廊下を一人歩きできるようなまで回復させた。次は階段。一階から始め、とうとう三階まで上られるようになった。「いつかはようになつたら」と痛いのを我慢し、目が見えない分、廊下は何歩で入り口、階段は何段と数え、目以外の耳、鼻、皮膚等五官を働かせる訓練をしていった。そして、二年後、帳場の私を覗く氏の顔があつた。「おー」後はしばらく絶句したと記憶する。「階段を登つてきた。といつても四十年あまり参拝したなれた道、何もおそれることはない」という。

氏は病気で徳島市の渭東地区に住む新しい同病の友人ができた。彼が小松島の病院に通院するにはあの高架の末広大橋を通過しなければならぬ。「足が動かんようになつた友人は改良した自動車でどうにか運転ができるようになった。しかし、そこまでの間、末広大橋の上から何度ほりこんで死んだらと思うたことかと言つとる」と。これは光を失つた氏自身の葛藤の物語を友人の言葉を借りているのである。

「治そうとする意欲がないとまずなおらん。そのうえで家族に世話なつてこころまで良うになつた」と。その日、氏ははじめてサングラスをかけてきた。「まぶしいの私はあるいは光がよみがえつたかと期待して聞いた。「いや、私が話すとき先方を見て話す。相手の目を見ている私の目は健常者のように見えるらしい。町を歩くのに白い杖なんぞついとれんぼたら機敏に動くんて目が悪いと思つてくれん。これで目が悪いと見てくれるだろう」ここまで他に気をつかつているのである。「上見りやきりがなし、幸い私は目が見えんだけで、手足が動く、それだけでも幸せじゃ、この手が自由にならんんでみ、つらいでよ」そして、「私の話で、だれかが元気になるなら、名前も何もみな書いてくれ」と。

中津峰に参拝二十一年
小松島市 金西泰代
私今年二十二歳。父は私が一歳のときから月参りしたという。だが、ほとんど覚えていない。だが、ほとんどのきつかけなどまつた年分内から自然に私の習慣になつてしまつていた。また、私は佛教美術(曼荼羅等)に興味があり、神社佛閣に行くのが好きだ。いやお詣りによつて好きになつたのかもしれない。一回のお詣りは苦にならぬ。住職山田戒乗師には家族共々お世話になる。月参りの時々にお会いして住職は私赤ちゃんのおこころからこの紙面をさいていた。今、この紙面をさいていた。今、この津峰山のことを書こうと思つたのだが、不思議にこらな年この記憶がよみがえり、私は今春大学を卒業し、

四万八千日 ろうそく祭り

7月9日午後9時まで
10日午後5時まで

20世紀、最後で最大のご縁日



